

序

軟部腫瘍の病理は難しくて苦手だ、敬遠したい、そう思う皮膚科医はとても多い、そんな領域にあえて、向う見ずにも踏み込んでしまいました。

臨床医として長い問診療に携わり、経験した症例をまとめてみたい、大原アトラスシリーズに加えたい、軟部腫瘍が苦手な医師にも分かりやすい資料を提供したい、そんな気持ちから書き始めました。しかし HE 所見の解釈すら難しいし、免疫染色からさらに進んで遺伝子・染色体の時代になった現在において、HE 主体の本が果たして役に立つのだろうかと思ひもとなし気持ちもぬぐえませんでした。

しかし、先端的な検査がどこの施設でも可能なわけではなし、診断のとっかかりはまずは HE というのはいつの時代でも不変・普遍的なわけで、臨床医の視点からの本もそれなりの意味があるだろうという希望的観測・期待を奮い立たせました。

もとより、病理学の基本を勉強した経験はなくほぼ独学の臨床医ですので、危なっかしい船出ではあったのですが、虎の門ファミリーの一員で皮膚病理医として活躍中の武藤律子さんの絶大な協力が得られて、最後まで辿り着きました。症例の選択から始まり、所見の解釈、記述の仕方に至るまで、赤ペン先生の添削を得て初めて本書は完成できました。

出来上がってみると、手前味噌ではありますが、臨床医が単著でこれだけの種類の疾患を記載した本はきわめて稀ではないでしょうか。そして、臨床医の書いた本ならではの特征として、すべての症例ではありませんが、臨床写真、画像所見、手術、肉眼剖面、弱拡大から強拡大に至る鮮明な病理写真などは、類書にないものといえるでしょう。残念ながら、過去の症例に関しては個人情報云々の厳しい時代となったために、病理標本の追加切り出しができず、免疫染色などは不本意な結果となってしまいました。筆者の個人的な能力の限界もあり、疾患の本態や記述の詳細さには欠けていますので、それらは他書にゆずり、アトラス・図譜としては十分に活用していただけると念じています。

2026年7月

大原 國章